最近ニュージーランド南島で森林と気候の大規模な観測をした結果，興味深いことがわかったと報ぜられている．すなわち，原始林の品種と型の分布を解析して，この地方の森林は比較的近年の局地気候の変化によって不安定な状態にある．現在は品種が活潑な再分布をはじめているところである．やがて，新しい森林の型が発達形成されることだろうというのである．ずいぶん大胆な結論であるから，一片のニュースだけで頭から信用してしまうわけにはいかない．どれだけの資料をどのように整理して結論を導き出したのか途中の経過をくわしく知りたいところである．ただ，原始林の林相をしらべていって気候の問題に入っていこうというねらいは見る目の角度が新しくおもしろいと思う．長い期間の気候から林相を考察するには，いろいろなメカニズムがあり，とうていせまい一つの学問の分野だけで解決をつけられるものではあるまい．おそらく，森林の花粉が風で運ばれ，乱流で拡散されることであろうが，長年の現象の集積した結果が林相として観察されるわけである．気候学と林学と植物学と物理学と気象学等の境界領域の問題になるから，よほど大がかりな協力がなくては研究を進めて行けないだろう．このような境界領域の学問は身近にいくらもころがっているのに案外かえりみられていないが早急に解決されなければならないものが多い．（I）

谷風　詩経に「習習谷風以陰以雨」という語がある．この谷風（こくふう）とは東風（こち）のことで，そよそよと東風が吹いてくもりから雨になるという意味である．気象学の第1歩を述べている点でもおもしろい．話は変るが，筆者がある海岸の谷間で風の小気候観測をしていたときのこと，一人の漁夫がよって来て「どっちから吹いてるか」という．谷の出口の方をさして，「こっちからだ」と答えると，「それはおかしい．沖の波を見ろ」という．「それが，その地形の影響で……」と説明してもきかない．問答のあげく，「お前の器械はこわれてる」ということになってしまった．

谷風を気象学的に定義して，ターミノロジーを明らかにするのはもちろんたいせつである．また，外国では谷風が東風の意味にも使われると知らなければ詩経の言葉も解せない．島や半島では，「日中は海よりの風，夜間は陸よりの風」というような天気予報はよい．これに，「沖合いは（例えば）南よりの風」とつけ加えればなお結構である．しかし前半の文句はほんの沿岸部，後半はまったくの沖のことである．具体的に谷風・山谷の範囲がわかってなければどうにもならない．そして，その地区の沿岸漁業の季節，農業の兼業をしている人口なども知ってなければ，先の人達の役には立てられない．

(No. 44)

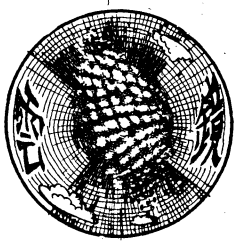
天気予報の旗をみるたびに，あの旗で天気予報の解る人が，いったいどのくらいあるのだろうかと考えてしまう．おそらく一般の人達には無用のしろものだろう．むしろ，「あすは，くもり，のち小雨」と書いたのぼりでも上げた方が，ずっと一般向になりはしないだろうか．

そのほか，天気予報の用語にしても一般には解らないものが多いし，長期予報の発表文でも，「読んでみたが解らない」という人が少なくない．

これは，2，3の例に過ぎないが，気象台の仕事にはどうも「独りよがり」なものが多すぎるような気がする．もっともっと世の中にでて，気象と社会とのつながりをハッキリさせ，どんな問題が一番に重要な問題であるかをつかんで仕事をしないと，天気予報の旗のように，一般からはおきざりにされているのに，本人だけはいい気になって，お高くとまっているということになってしまう．

まだお高くとまっていられる間はよいが，気象台の仕事は意味がないと予算もなにもとれないで，気象台の影が次第にうすれてしまったのでは，まったく国民に対して顔むけができなかろう．

この災害国で，気象台の仕事が年々小さくなってゆくのは，その運営方針に欠かんがあるからだろう．　(T.A.)



気象屋　こんな名前が適当かどうか分らないが，気象を対称として飯を食っている仲間の諷刺的立看板に書くとすればこれであろう．気象台に奉職している職員は勿論，その外郭団体である気象協会もそうであろうし，私営の天気会社もそうである．もっと広く見れば気象測器を専門に製作している会社も気象屋かも知れない．印刷物となって表われる面から見ても，気象集誌のような純学術雑誌は除くとしても，天気（日本気象学会），天文と気象（地人書館），気象（気象協会），タイフン（大阪管区気象台内，近畿防災気象連絡会）その他気象に関係する業務以外の定期又は不定期の刊行物，印刷物は大した数になる．各管区気象台はその直下に気象協会を持ち，地方気象台，海洋気象台測候所も関連する団体が気象に関する印刷物を出しているところがある．誠に結構なことである．唯一つ筆者が妙に感ずることは，本職の気象屋はちゃんとした規定によって一本に結ばれているが，その他の外郭団体のつながりはあまり緊密ではないようだ．中央気象台構内にある気象協会を始めとして各管区気象台と関係ある気象協会は互に連絡を取って一本の線を確立した方が民間に取っては有難いことのように考える．気象に関する雑誌類にしてもそのような傾向を取れば，もっとよいだろう．　(Z)